まだ夕暮れ時の時間。夏場ゆえの暑さもあるが、それ以上にのしかかる緊張感に、犬吠埼風は搾り出された額の汗を袖で拭って、息をつく
「はぁ……はっ……んっ」
心なしか吐息は熱っぽく飲み込む唾液は粘ついて感じる
いけないことだと解ってはいたけれど、どうしても我慢できなかった
どうしても、したくなった。悪いことだとしても、一時の油断が理性を撥ね退けた
「すぅ……すぅ……」
風の目の前にあるベッドでは、愛しき恋人である天乃が頭の上で手を縛られながら、穏やかな寝息を立てている。
「ごめん」
一言謝る。その言葉はきっと届かない。それを解りながら罪悪感を零す。完全な自己満足だった。心を許してくれている天乃に、風は睡眠薬を飲ませたのだ。出した飲み物に薬を溶かして。
夏場のじっとりとした暑さにかいた汗に艶がかった肌、張り付いた髪
ほんのりと感じる汗の匂いと、清潔な匂いは、情欲を刺激するには十分だった
「……言い訳か」
風は諦めたようにそう零すと、肌蹴たシャツから見える臍の小さな窪みの辺りに手を這わせる。汗ばんでいる分、肌が吸い付く

「んっ……」
ビクッっと天乃が反応したが、風は怯えた様子もなくそのまま優しく撫でていく。解すように、揉むように。天乃の白い柔肌の感触を確かめる。車椅子生活になって二年程度立っているはずだけれど、腹部には贅肉はまったく感じず力の入っていない腹筋の柔固さがあった
「凄い」
たとえ両足が動かなくなったとしても、動かせるところはしっかりと動かして体を鍛えているのだろう。感嘆の声を零した風は、天乃の腹部に浮かんだ汗を指で拭って、口に含む
無意識な行動だった。何か思ったわけでもなく、樹の頬に付いたクリームをぬぐって舐るように、極当たり前に、そうしていて。
風は少し驚きながら、体が少しずつ火照り始めていくのを感じる
腹部を撫でながら少しずつ上に上らせていく、臍周りから脇腹、脇の下へと、少しずつ
そのたびにじっとりとした汗を感じるし、服がズレると、魅惑的な匂いが鼻を突く
「っ、んっ」
撫でていくと、天乃の反応も少しずつ色気が増していく。頬は少し紅潮して、縛られた手は動こうとする。熱気を吐き出す唇は艶かしい糸が伸びる

「天乃……」
そぅっと身を乗り出して、ベッドに手を突く。ぎしりと軋んだ音がして身構えたが、睡眠薬の効果は思っていた以上に強いのか、天乃は眠ったままで。風は天乃の胸を覆うブラにまで手が到達したのを感じながら、唇を重ねる。
「っ」
最初は誤ってぶつかってしまっただけのようなキス
「んっ」
今度は少し押し付けるように、けれども短く
「んっ、んくっ……んっ」
そして、唇の柔らかさ、厚み、乾いた部分とぬるりとした部分。その全てを感じられる少しばかり強引なキス。天乃が起きる可能性はあった。けれど、風はそのキスをした。起きてくれれば自分の気持ちが宥められるかもしれないと、そう思って。
「っは……は……」
しかし、天乃は目をさまさなかった。息苦しさに少しもがくことはあったけれど、それだけだった。
シャツを胸元まで引き上げ、ふくよかな胸を露出させる。黒色の下着は大人びたレースがおしゃれに刻まれていて、ただでさえ大きく見える胸は寄せ上げられて、窮屈そうにブラの上部からはみ出す。
思わず息を呑んだ風は、ブラを外すか否かを迷うことなく後者を選んで手を滑り込ませる。指一本でも窮屈で、二本、三本と押し込んでいくと、柔らかい圧迫感が手を包み込む
（男子だったら、ここでアレをつかうのよね……）
女の子が持っていないもの、女の子が受け入れるもの。
参考までにと動画や画像を見たことのある風は、一部の男性が性欲で固めた歪な芸術品を胸で挟ませたりするようなものも覚えがあった。そのグロテスクな性作物を自分で扱うのも何するのも、今の風としては理解できないし考えられないが、乳房で扱くという行為への理解は、なんとなくだが出来た気がした
汗ばんだ湿気と乳房の柔らかさに挟まれながら、風は人差し指で乳首を探り当て、くりくりとボタンを操作するように倒したり、押し込んだり、擦ったりと刺激していく
「んっ、っ……ぁ……んんっ」
「……聞いてた通り」
「はぁはぁ……ぁんんっ」
まだ右の胸にしか手は出せていないが、それだけでも、天乃の上げる嬌声は淫らさを増す。体の熱も、夏の暑さなど無関係に昂ぶっていく
胸が弱いという情報の正しさを思いだして、東郷だけでなく友奈までもがそんな情報を持っていることを、ねたましく思う
その嫉妬ゆえに思わず力を込めて握った瞬間、天乃は苦しさに呻いてゆっくりと目を開く

「ん……ぅ、ぇ？　……えっ？」
自分がベッドで寝ていることはすぐに解ったし、それに関しては何の疑問も抱かなかった。だが、体が動かないのだ。足ではなく両手が。それも手首の辺りを縛られているかのような感覚が段々と脳に伝わっていく
「え？　私……え？　風？」
「……天乃、ごめん」
「ごめんって、待って。意味が……私、なんで」
腹部に感じる空気、胸元に見えるずり上げられたシャツ。自分が半ば脱がされかけていることを理解した天乃は、自分の状況を理解した分、なぜ風がこんなことをするのかという戸惑いに襲われて。
「んんっ！」
胸をもみしだかれて、声を上げる。熱はもう体に広がっていて、敏感な乳房の神経は張り詰めており、下腹部にもかすかだが疼きを感じて。
「や、止めて、風……お願いっ……んっ、っぁっ」
ブツリとブラのホックが外され、抑えられていた胸が空気に晒されたのを感じたが、天乃には抵抗の余地はなかった。
「天乃が構ってくれないから」
「それは、私だって……」
「だから、決めたのよ」
風はわざとらしく口を開いて見せて、そのまま天乃の乳頭をくわえ込む。ほんのりと感じる天乃の味。甘いような、苦いような、辛いような良く解らない複雑な味。こりこりとした食感。ぷくりと可愛らしくまだ初々しい突起は快感に隆起していく
「んっ……っは……ぁ、ぅ……」
「んちゅっ、んっ、んっ」
キスをするように味わうと、淫らな水音はぴちゃぴちゃと零れる。自分に対しての刺激なんて殆どないのに、体は疼くことをやめられない。火照りきって、下腹部が刺激を求める。聞こえる天乃の甘く蕩けた淫靡な声、蒸れてより濃くなって感じる淫らな匂い。風はびちゃびちゃに舐めて味わった天乃の小さな乳頭から顔を上げると、雪のように白い肌にキスをする。吸い上げて、吸い上げて、唐突に離す
目には見えない特殊な力によって穢れている体は、美しかった。白くて、滑らかで、柔らかくて。
「キス……は、もうだめ？」
「っ」
唇をきゅっと締めて声を漏らさないようにと堪える天乃は真一文字のまま、涙に揺らぐ瞳で風を見返す。何でこんなことするの。どうしてこんな無理矢理。驚きと悲しみに沈む
「お願い、風……止めて」

「もう無理」
「後で、後でちゃんと……えっちするから。その時に好きなだけして良いから」
「無理」
こんなことをしてしまったのだ。薬を飲ませて眠らせて、無防備になった手を縛ってキスをして。肌に触れて、胸に触れた。えっちなことをした
今更引き下がれるものかと、風は思う
（体が満足しない……無理よ。天乃）
風は天乃のスカートの上から腰を撫でて、お尻を撫でる
「や……っ」
そのままスカートの中に手を忍ばせて下着の上からお尻の割れ目を滑り情欲のはけ口に触れる。じんわりとした水気が指先に触れる。ほんのちょっと押し込めば、くちゅりと淫らな音がして、淫靡な匂いがあふれ出す
「んっ、っ……」
顔を真っ赤にした天乃は唇を固く閉じ、瞼を閉じて涙を零す。強引な行為でも感じてしまうこと、信じていた人が強引に犯してくること。色々な悲しみの雫を風は拭う
「天乃、我慢しないで」
「貴女は我慢して」
「……」
意思は変わらない。そう判断した風は、天乃の割れ目に触れる人差し指の動きを止めて突きたてる。ビクッと振るえ、目を見開いた天乃は驚きと恐怖に揺れる瞳で風を見て「嘘でしょ」と、呟く
ゆっくりと、沈み込んでいく。人差し指は下着ごと天乃の陰唇へとすり込まれていき、そのざらついた感触は女の子の誰しもが持つ性感帯をも巻き込んで
「んくっぅっ」
押し殺した嬌声が零れる。手首を縛る紐が繋がったベッドの端がガタガタとゆれ、天乃が首を横に振る。頑張っても、頑張っても。体の反応は殺せない。まったく無関係な場所に手を出されているなら無反応も貫けるが、風はもう知っているのだ。天乃がどんな責め方に弱いのか、どこがもっとも気持ち良くなってくれるのか。だから、天乃は感じてしまうことに、堪えられなかった
「やっ、ぁっ……んっ！」
「ここが気持ち良いのよね。知ってる」
「はぁっあっはっ……はぁはぁっ……」
「んっ」
「んぅっ」
殺気まで拒んでいた唇も、快楽に刺激されて激しくなった動悸の前では容易く解放されて

いて、風の唇は抵抗を一切受けずに天乃の唇と重なる。熱っぽい吐息が口の中に入ってくる。忍ばせた舌は口腔のネットリとした淫猥な熱気に包まれていく
「んっふっ、んんっ……んんぅ……」
噛み付こうと思えば噛み付けるはずなのに、天乃はそれをしない。体はビクビクと震えて、閉じた瞼からは涙が染み出して伝い落ちる。そんな悲惨な姿を見ても、心の昂ぶりは収まるどころかより激しさを増してしまう。自分が優位な立場にいるという優越感、大好きな体を蹂躙できているという征服感。感じるべきではないそれらは、体に悪い食べ物が最も美味であるように、風を誘惑する
「っは……」
「ぁ、ぅ」
舌と舌を絡めあうような、淫らなキスを終えて離れると、唇はどちらのものか解らなくなった唾液に濡れ、艶やかな糸が引く
「……最低よ。風」
「ごめん」
「謝るくらいなら――ひぁっ！」
「うるさい」
「ふ、風――んっ、っぁっ、あっんっ！」
「それでいいのよ、それで。天乃は」
口うるさい言葉なんて聞きたくなかった。許しの言葉も何も、今は聞きたくなかった。ただただ、自分の言葉で気持ち良くなって、喘いでいてさえくれればそれで良いと、思った。他の誰かにしたように、見せたように、聞かせたように。
「やっ、風、それっ、んんっ！」
天乃の下着ごと割れ目に触れる右手は、下着では押さえきれなくなった水気を感じてより細かくより激しく、快楽に隆起した小さな性感帯を刺激する
腰が跳ねるように浮いても、力ない足は支えきれずに腰を落とし、また刺激されて浮く。逃げたいのだ。嫌なのだ。なのに、どうしようもないのだ
「やっあっ、んっ……ぁっ」
「もう少しね、天乃」
「んっ、くっはぁっ……ぁんっ」
少しずつ、刺激を強めていく。ただ上下に擦るだけだった指は、小さな円を描くように動かす
「……アタシも」
空いていた左手を下腹部に伸ばして、同じく湿った下着の上から陰核を突くと、ビリビリとした刺激は強く逆って駆け抜けて
「んっ！」

一瞬で力が抜けそうになったけれど、何とか堪えて息をつく。自分ひとりでしているときはこんなことはなかった。天乃のことを思えば頑張る必要は無かったけれど、それでも、全然違うと風は思った。
「ディルドがあればよかったんだけどね」
「デ……るど？」
荒々しい吐息を零し、疑問符を口にする天乃に微笑み風は答えることなくキスをする。際限ない快楽に溺れさせようとはしていないのに、抵抗はなかった。
「んっふっ」
「んっんちゅ……んんっ」
キスをする。舌と舌を絡めあう熱烈なキス。そして、風は天乃の下腹部と自分の下腹部をそれぞれまさぐっていく。人差し指で等しく、同じところを刺激する。
心地よさの淫猥な声は互いに打ち消しあって消え、体の内側に響く快感は共感しあって増幅する。どっちがそれを感じているのだろう、誰が先にまで届くのだろう。
自分は風と天乃どっちなのだろう
何もかもが混ざり合い、ふわふわとした感覚に解けていく中、一際大きな波が体を穿って互いの中に嬌声を吹き込み――屈服の証を淫口から迸らせる

――犬吠埼家、風の自室

「っは……ぁ……あ」
ベッドの上で荒々しく声を漏らす風は、自分の淫らさに塗れた右手の指を眺めて、息をつく。まだまだ体の疼きは収まらない。けれど、もう天乃を強引に犯す妄想は出来ないなと思う。とはいえ、毎度毎度やってしまうのだが。
「嫌がらせするのが好きってわけじゃ、ないけど」
用意しておいたタオルで手を拭き、後始末をして、新しい下着を箪笥から掘り出す
すーすーとあざ笑うように撫でてくるいやらしい空気に悪態をつきながら、下着を履き替える
「……ほんと、最低だけど、悪くないと思っちゃう」
もちろん、合法的にというべきか、なにもなくただ天乃といちゃつく妄想も好きだ。それでも十分捗るのだが、三回に一回はこういった妄想をしてしまう。絶対に出来ないからこそだとは思うが、風は少しばかり怖くなった

「ふぅ……あー……」

天乃のことを思うと、また少しだけしたくなってくる。けれど時間を見れば夕飯を作るべき時間で。
――コンコンッ
「！？」
不意に扉が叩かれて叫び声を上げそうになった風が何かを返す前に、聞き馴染んだ「お姉ちゃん？」という声が聞こえて、「どうしたの？」と返す。妹の樹だ。
極力声を押し殺したから聞こえてないはずだと想いながら、恐る恐る返答を待っていると、
「まだ部屋にいるから、どうしたのかなって」
「あ、ああ」
「ご飯はどうするの～？」
「あー……」
日常的な樹の問いに、風は自分の下着だけの下半身に視線を落とし、淫らな匂いの染み付いた右手を嗅いで、ため息一つ。こんな手で妹の食事を作るべきだろうか？
いや、ありえない。なら天乃は？
「……」
「お姉ちゃん？」
「い、いやいやいやいや！」
「どうしたの？」
「な、何でもなーい！ それより樹、今日は久しぶりに外食よーっ」
慌てて取り繕い、樹が少し嬉しそうに部屋の前から離れていくのを聞きながら、風は自分の危うい考えを振り払う。自分の性欲の副産物を天乃の口に入れるなんてことはもはや狂気だ。　参考に見た動画や画像にそんな感じのものがあったとしても、狂気だ。
「あー……えっちしたい」
そんな呟きは誰に聞かれるわけもなく寂しく消えて、とりあえずはと風呂場に向かう
「お姉ちゃん、大丈夫？」
「りせーがやばいかも」
「せーり？」
「ん」
みんなから話を聞いて、かなり欲求が強くなってきて、一人えっちさえ頻度が増えてきたいつか出来るかなと、想いを馳せながら風は身支度を整えていく。

犬吠埼風
～情欲の暴走編～